

びて来たものと思うし、日本の土を踏むことができた。  
感激は忘れることはない。

## 一生いたむ戦争の心のきず

宮城県 板橋 エナ

夫は、開拓団の本部勤めでしたので、水田は朝鮮人、畑は満人に作らせていて馬一頭、乳牛二頭、蜜蜂二十群がいました。昭和十九年五月召集令状を受けて連絡はとれず、子供は四人長男は昭和二十年四月小学校に入學し家族はみんな元気でした。

ところが、昭和二十年八月、ソ連軍の突如の侵攻、そして敗戦、大変なことになりました。四人の子供を見守りながら、荷物の取纏めや脱出のための食事の準備、炒米、肉の煮込みなど夢中でした。四・五日経った時、日本人は狙われていて危険だからというので、部落のいか所を集まることになりましたが、私は自宅で子供を守りました。

その晩集まった人達は暴民に襲われ、畑の中に逃げ入る人、大きな桶に隠れた人、そんなことで身を守ったのです。今度は本部に集まるようにとの連絡でした。二日程経った日、団長が、自宅に籠っている私達を心配し無理矢理本部に収容され、こうして不自由な生活が何日か続きました。

九月九日昼ごろ突如暴民が多勢襲って来て、みんなは子供を連れて山の中へ逃げました。私は逃げ遅れてしまい、暴民に金を出せと脅され、そして棒で叩かれたりして、拳銃、部屋から布団や衣類を一切持ち去られました。私は、叩かれ、どす黒く腫れ、痛みに耐えながら必死に子供を守りました。十日昼ごろ再び暴民の一団が襲ってきたのでこんどは逸早くみんな山中に逃げました。その時青葉や安祥の開拓団の人々も襲撃され、命からがら逃げて来ました。そうして四つ五つの団が集まったのです。

何とか自衛手段を取るべく翌十一日から屋根や門に見張り人を置き、女子供は倉庫の奥にひそめました。しかし、乗馬し銃を持った何人かを先頭に槍や棒を持

った暴民が一団となり襲つて来る。撃たれて見張人が屋根から転落したり、死人や怪我人がたくさん出ました。

暴民は略奪の限りを尽くし引きあげてゆきました。

私も着物を剥ぎとられ子供四人抱えるようにしてぼつと佇んでいると安達さんが迎えに来て親切な満人が匿ってくれるというので連れられて行つたら既に二十人ほどおりました。子供を寝かせびくびくしながらの一夜でした。

翌日満人村長さんから、うちに来るようにと連絡があり、二人を背負い二人を連れて四キロぐらいのところまで腰巻姿で歩きました。うろろろしている内にふと私の子供一人が見えませんが「繁子」「繁子」といくら呼んでもいないのです。満人が連れて行つたらしいという。しかし捜しに行きたくも行くことができないのです。

五日ぐらいした時、日本人は義勇軍のところに集まれと連絡がありました。山中や田畑の中や藪の中に隠れていた人がぞろぞろ出て来て長い列ができました。

そして負傷している人、腰の立たない病人など義勇軍のところへ行くには大変なことでした。

途中水害で流失したあとの仮橋など子連れは至難のことです。繁子が満人のところにいるのだと自分に言い聞かせつつ、何とか助け合つて義勇軍に着きました。たくさんの方が何日も山中を歩き廻り疲れ果ててみんな青ざめた顔。夜になつても横になつて寝ることもできず、その晩の食事はありません。朝やつとコウリヤンとひじきのお粥。池の水でおしめの洗濯をしそれを草にひろげて乾かすのです。

一週間ほどするといろいろ噂が流れました。どこかへ連れていかれるとか。日本に帰るとか。汽車に乗るにはお金は一切持つては駄目、持つていたら銃殺されるとかというものでした。私は安達さんに分けていただいたお金を全部出し命令を守つて汽車に乗ることになりました。一人に半分ずつのおにぎりを食べ、やがてハルピンに夜着き収容所まで歩きました。収容所の部屋はやつと横になる程度の詰め込みです。翌日よりわずかのお粥の配給。子供を泣かせるな、ソ連軍が来

るといふ、子供は食べものがないので泣きます。何人かの子供は亡くなりました。

一か月ぐらい経った頃、南下することになり貨車で出発。監視のソ連兵が走っている汽車の上で女探しや物盗りに来るのです。逃げようとする台車から転落もしかねません。私のところは台が毀れていて、冷たい風が吹きあがるのです。十月でも寒い、空腹で子供はすっかり弱ってしまいました。新京に着き、駅からしばらく歩いたところは学校でした。疲れたなどと言っている余裕はなく焚火でおしめを乾かしたりしました。

子供は食べる力もなく、十月二十三日朝三時ごろ亡くなりました。私の子供だけでなくたくさんの人が亡くなりました。供養することもできず、出発の日は馬車が来てたくさんの死体をどこかへ運んでゆきました。

新京駅を発車し、途中汽車が止められ、山の方から八路軍が撃ってきたのです。銃撃でしずまったあと、おんぶしていた子供が亡くなっているのに気が付き、

汽車を下りて何人かの人が葬ってくれました。奉天駅に着き、みんな哀れな姿で歩き收容所の富士青年学校に入りました。広い講堂にぎっしり。むしろをかぶる人、麻袋にもぐる人、着のみの人には殊に寒さが厳しく、そこへソ連兵の女探し、みんな必死でした。

收容所では、たまのお粥の配給があるだけで、自分で生きることを考えなければならず、お金を持っていく人から借り満人から餅や油揚げを仕入れ立ち売りをしたりして、いくらかの利益で飢えをしのぎました。

そのうちみんな熱病に罹り寝込んでしまいました。医者も薬もなく、中にはみるみる顔が黒くなり肉親を呼びながら亡くなる人、寝ていると思ったら死んでいる人、涙を流すゆとりはありません。担架で外に運ぶ校庭に墓をつくりました。寒さは厳しく凍って掘ることもできず死体を柴木のように積んでありました。

そのうち私の子供も熱を出し半月ほど寝込みました。が何とかよくなり、今度は私が熱を出し悪くなるばかりです。吐血や血尿という有様、その時八歳の子供が水で頭を冷してくれたり、小便を捨ててくれたり世話

をしてくれました。

チフスだろうとこのような病人が多勢でて元気な人達は別の収容所に移されました。病人ばかり残ってどうすることもできません。死を待つばかりでした。团长さんをはじめ世話人など次々に亡くなりました。寝たきりの私は骨と皮ばかりの体をシラミが食うのですが、そのシラミをつぶす力もありません。

団員の誰かの話で、子供が欲しいという満人の家に連れて行かれましたが、私の病気は悪くなるばかりで、水も口に含むことができず、八日間ただ夢中で眠り続け、気がつき少しづつ良くなってゆきました。二か月ぐらいして今度は満人が病気になり、私に帰ってもよいと言われ子供を残し富士青年学校へ戻りましたが誰もおりません。きれいに片付いていて庭の墓もなくありません。一台の荷車に死体が積まれてあり私を睨んでいるようでした。収容所を捜し歩き暗くなってようやく春日小学校の収容所に着きました。そこには隣家の人たちもおりとても心強かった。

六月末頃奉天市和平区漢口街の収容所を引揚げるこ

とになり、奉天駅の広場に何千人と集まり、今度は客車でした。途中何回もDDT消毒や注射を受け、口鼻から船に乗ることになりましたが、その時の私の気持ちは、体二つになりたかった。それは半身は子供と現地に、あとの半身は子供を連れて内地にと複雑な気持ちでした。

引揚げて一日も忘れることのなかった中国に残した二人の娘から便りがあり、竹子は昭和五十四年十二月十九日、繁子は昭和五十九年四月十七日に一時帰国して会うことができました。戦争とは一体誰が幸せになるのでしょうか。

## 敗戦と在満邦人の苦闘

山形県 斎藤 藤子

私が渡満したのは、小学校三年生の秋、昭和十五年九月の末でした。

当時我が家では、祖父母、父母、私達兄弟四人の八